

私にとっての全カリの過去・現在・未来

日高 聡太

この原稿の執筆依頼をいただき、改めて、インターネット検索エンジンで、全カリという単語を入力して検索にかけてみたところ、すぐに全カリについて詳しく紹介したwebページ (<http://www.rikkyo.ac.jp/academics/undergraduate/zenkari/>) にたどり着いた。「全カリの歴史」というページを読んだところ、「40年の歴史をもつ一般教育部の成果と知的エネルギーを発展的に継承し、強力な全学的運営責任体制を樹立して、「全カリ」を創出し、1997年度から全面的に展開したということである。筆者が立教大学文学部心理学科に入学したのは2001年4月なので、ちょうど全カリの試験運転期間が終わり、本格的にプログラムが走り出した時期だと推察される。

全カリの思い出は、何と言っても言語教育プログラムである。英語と自由選択言語（筆者はドイツ語を選択）について、1年次から2年次にわたって、毎週2-3回程度の講義を受講していたと記憶している。英語は主にリーディングとスピーキングを学ぶ講義に分かれており、非常に英語に長けた日本人の先生方に教えていただいた。講義は冗談が飛び交う和やかな雰囲気で、それまで学習していた受験英語とは異なった視点から、楽しく学んだことを覚えている。また、入学時のプレイメントテストの成績をもとにクラスが固定されていた。そのため、毎週決まった顔ぶれが顔を合わせる英語のクラスは「英クラ」という通称で呼ばれ、同じ英クラに所属する学生とは自然と仲良くなり、また「英クラ飲み」という

名の集まりがあちこちのクラスで開催されるなど、学生間の交流促進にもつながっていた。

言語以外の科目を受講することも、もちろん必須であった。その内容はバラエティに富んでおり、例えばスポーツ科目では、当時10号館の裏にあった運動広場（現在は図書館になっている）で、バスケットボールに汗を流した。また、講義科目を受講することも求められ、全学的に開講された様々なテーマ・内容の講義を受講する機会を得た。

当時を思い出して失敗だったと思うことは、心理学を学ぶことに執着するあまり、「心の科学」という名前のついた講義を複数履修したことである。履修してすぐに学科で展開されている講義の内容と一部または完全に重複することが判明し、またその逆に、学科の講義を受けている際に、全カリで学んだ内容と全く同じであることに気がつくことがあった。今思えば、社会学や教育学など心理学の近接領域や、心理学とはあまり接点のない分野の講義を取るなど、違った視点を獲得する契機を逃してしまったと感じる。

また、当時不満に思っていた点として、魅力に乏しい講義、教員に熱意が感じられない講義が散見されたことである。例えば、「○○先生の講義は、毎回出席しなくても、指定された教科書を購入して持ち込み、試験さえ受ければ、必ず単位が来る」という楽勝講義に認定されているものがあった。また、教員自身が書いた教科書を購入させ、それをただ読むだけという授業

も実際に体験した。当然講義そのものの魅力がなく、また私語が多発するなど受講環境も悪かったが、教員側から何かを改善しようとする意思は感じられなかった。このような類いの噂に触れ、また実際にあまり質の高くない講義を受講する度に、全カリに対する期待度が薄れていったこともまた事実である。

全カリは、全学部の学生が自由に受講できるので、確かに教員にとっては講義内容や展開の設定が難しい。しかし、2012年度に教員として全カリ科目「心理学への招待」を担当することになった際、自身が不満足を感じた経験を活かし、どうにか受講生にとって楽しい講義を展開したいと考えた。幸い筆者の専門分野は「錯視」を始めとする体験型のデモンストレーションが豊富にあるので、それを積極的に活用しようと考えた。また、学生に向かって常に一方的・一方向に話すのではなく、毎回リアクションペーパーを配布・回収し、寄せられたコメントから各回の講義で何を分かってもらえなかったのか、またどのような疑問が浮かんだのかを把握するようにした。そして、次の講義回の冒頭で、前回説明が不十分であると指摘された点を補足し、また提示された質問に答える時間を設けた。これが大変好評で、毎回リアクションペーパーにはこちらが答えきれないほど膨大な質問が寄せられるようになった。現在、領域別科目では、自身の専攻に近い内容の講義は受講できない設定となっているので、受講生は心理学に触れたことのない学生ばかりであったが、こちらにとっては斬新、奇抜、また示唆に富んだ質問・コメントが寄せられ、毎回色々なことを調べる契機になるなど、教員としても大変勉強になった。講義の最終回頃に実施する授業評価アンケートでは、

こういった取り組みを肯定的に評価するコメントが多数見られ、全体的に高い評定を得ることが出来た。このような経験は、現在の筆者の講義運営にも大変活かしている（また、以前は講義評価アンケートの存在意義について懐疑的であったが、現在はアンケートの評価・コメントを積極的に活用する方向で考えるなど、現金な心変わりまで生じた）。

現在、全カリでは、先に述べた一部の科目群では専攻に近い講義は履修できないという規定や、TA・SA制度の導入による円滑な講義運営の促進、また各学部・学科の教員が責任を持って講義担当教員を選定・推薦する仕組みなど、当時筆者が学生の立場から抱いた後悔や不満をあらかじめ排除するような制度が導入されている。さらに、特に素晴らしいと感じるのは、言語科目に関して、海外から英語が堪能な先生方をお招きして講義が展開されている点である。講義内容もリーディングやライティングのみならず、ディスカッション能力やプレゼンテーション能力を培う講義が展開されている。たまに教室を覗くと、学生と教員が英語で談笑している姿を見ることができ、自分が学生の時にもこのような講義があればと、とても羨ましく感じる。

2016年度には、全学的なカリキュラム改訂に伴い、全カリの枠組みも変わると聞いているが、専攻という枠組みを外した純粋な知的な好奇心を満たし得る、多彩かつ質的に高い内容を扱った講義が1つでも多く展開されるような取り組みが今後も継続されることを希望する。また1人の教員として、そのような取り組みに微力ながら助力していきたいと考えている。

ひだか そうた
(本学現代心理学部准教授)